

日本経済新聞

増える死因第1位「がん」の国 心臓病による死の大幅減で



がんは1981年以降、日本の死因トップの座を占めています。年間の罹患（りかん）者数は2040年ごろに約105万5千人とピークを迎える見込みです。当面の増加は人口減以上に高齢化の影響が大きいことが背景にあり、将来的にがん死亡数は減少に転じまず。

フランスやカナダ、オランダ、英国、韓国などでもがんが死因の第1位です。他方、経済協力開発機構（OECD）加盟国で、死因のトップががんの国は38カ国中11カ国にすぎません。残りの27カ国は心臓病などの循環器疾患が最多の死因です。

先進国の二大死因はがんと心臓病です。心臓病による死亡率は先進国で激減しています。年齢構成の影響を取り除いたがん死亡率（年齢調整がん死亡率）も減ってはいますが、心臓病ほどの減少はみられません。今後はがんが死因第1位になる国が先進国で増えると予想されています。

心臓病激減の立役者の一つが、前回も紹介した「スタチン」です。悪玉コレステロールを下げる特効薬で、米国で心筋梗塞による死亡の劇的な減少に大きく貢献しました。現在、米国の成人の3人に1人がこの薬を服用しています。

米国の死亡原因のトップは今も心臓病で、がんは第2位です。1970年の米国人の死因をみると、約4割が心臓病によるもので、年間死亡数は約100万人でした。それに対し、がんによる死亡は約34万人で、心臓病の3分の1程度でした。その後、約半世紀を経て米国の心臓病死は68万人まで大きく減り、年齢調整死亡率は当時の約3分の1の水準まで低下しました。心筋梗塞による死亡に限ると、死亡率は約1割まで下がっています。

一方、米国のがんの死亡率もピーク時（91年）の3分の2まで下がったものの、心臓病ほどの減り方ではありません。2024年の死亡数は心臓病が約68万人、がんは約62万人と差が縮んでおり、近い将来の首位交代が予想されています。

スタチンを発見したのは三共（現第一三共）の研究者だった遠藤章氏です。6千株ものカビやキノコを一つずつ培養してはコレステロール合成阻害剤を探すという地道な作業を続け、1973年に青カビから世界初のスタチン「コンパクチン」を発見しました。人類に長寿と健康をもたらす多大な貢献をした故遠藤氏にはノーベル生理学・医学賞が授与されるべきだったと思います。

心臓病と比べると、がんの死亡率低下を巡る事情はより複雑です。動脈硬化が主因の心臓病とは異なり、遺伝子の経年劣化で発生するがんは千差万別だからです。

がんと人類の闘いはこれからも長く続きます。

2026年6月17日